

山形・宝積院十一面観音菩薩立像再考

むらかみ ゆきな

村上 幸奈 (成城大学)

発表要旨

14
時
10
分
—
14
時
50
分松
ヶ
崎
・
西
キ
ャ
ン
パ
ス
内
セ
ン
タ
ー
ホ
ー
ル

山形市鮎洗町の宝積院観音堂に安置される十一面観音菩薩立像(以下、本像)は、県内屈指の優品として名高い作例である。像高は約52センチメートル、カヤ材の一木造で、所謂代用檀像と考えられている。本像は小像ながらも精緻な彫りを示し、造形には破綻がなく、仏師の技量の高さが伺える。頭上には大型の頂上面を戴いており、両肩を表す形態は、これまで多くの研究者に注目されてきた。

頂上面をめぐる問題について、最も詳しい論を展開したのは長岡龍作氏である。長岡氏は、本像の頂上面と比叡山前唐院像との共通性を挙げ、前唐院は円仁の請来品を納めていた場所であることから、前唐院像も円仁請来によるものであることを前提として、本像はその図像をもとに円仁帰朝後の9世紀後半に制作されたものであると結論付けた。

しかし、記録上の前唐院像と本像の形態が脇面や後面の有無など必ずしも一致していないことや、円仁請来図像の特異な造形性が本像には見られないことから、疑問を呈する向きもある。また、東北芸術工科大学文化財保存修復研究センターによって行われたX線分析調査により、本像の頂上面両肩以下が後補である可能性が浮上したことで、その図像的な特色については再検討の余地が出てきたと言える。

以上のような観点から、まず造形に着目して制作年代の再検討を行い、本像と特に類似する作例として、大阪・道明寺十一面観音菩薩立像、奈良・璉城寺聖観音菩薩立像、京都・宝菩提院願徳寺菩薩半跏像、奈良・秋篠寺十一面観音菩薩立像を挙げた。これらの作例はいずれも8世紀末期から9世紀初期に造立された可能性が高く、その制作背景には桓武天皇および土師氏、紀氏、和氏など、桓武天皇と近しい渡来系氏族の存在が考えられ、本像にも同様の制作背景を想定することが出来ると思われる。

桓武天皇は多くの渡来系氏族を周辺に置いたことで知られるが、特に優遇した氏族として、百済王氏が知られる。彼らが蝦夷地経営と深い関わりを持ち、東北地方に基盤を置いたことは、諸先学により言及されてきた通りである。桓武朝において、百済王氏は外戚として優遇され、数々の位階を与えられた。特に、8世紀後半から百済王氏出身者が相次いで出羽守に任命されている点に注目したい。

本像は宝積院に安置される以前、本寺である誓願寺にあったが、もとは誓願寺の本寺である宝幢寺に置かれていたと推定される。宝幢寺は『日本三代実録』において貞観年間に定額寺に列格された瑜伽寺を前身として復興された寺院と考えられ、本像がもと瑜伽寺に安置されていた可能性が高いことは史料からも想定出来る。その背景には、桓武天皇の外戚として優遇され、当時出羽守として赴任していた百済王氏の存在があるのではないかと。

本像については、これまで天台宗との関わりの中で論じられることが多かったが、上記のような観点から歴史的な背景についても改めて考察を試みたい。